

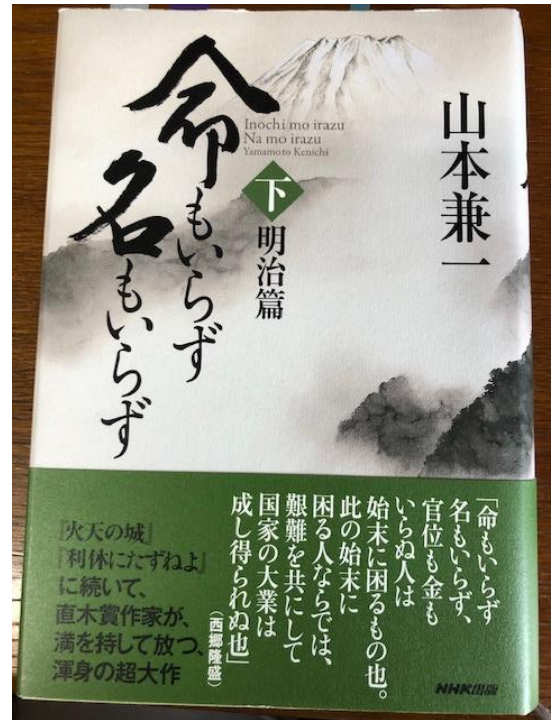
1、「命もいらず名もいらず」2010 出版 山本兼一著

三和銀行の同窓会誌「和光」112号（2021/12/1 発行）で銀行 OB の水野靖夫氏がリタイヤ後に歴史の定説に疑問を投げかける著作を多数出していることを知った。その中で「勝海舟の罫」（2018 年出版）が最も有名なので読んだ。この本では山岡鉄舟が江戸城無血開城の最大の功労者で、勝海舟と西郷との薩摩藩邸での交渉の下地は既に整っていたと書いてあった。

これを契機に山岡鉄舟に興味生まれこの本に出会った。それまでは、勝海舟、徳川慶喜、西郷隆盛、篤姫が無血開城に大きく貢献したと認識していたが、山岡鉄太郎（鉄舟）、高橋泥舟、大久保一翁が大きく関与していたとは知らなかった。

この本は江戸末期を舞台に山岡鉄舟の生涯を描いた伝記小説である。武士道についての解説が豊富で人生の手引き書にもなる本だった。青年時代の剣道の鍛錬や座禅に励む姿が印章に残った。山岡鉄舟を題材にした歴史小説では「荒海を渡る鉄の舟」（2020 出版）鳥羽亮著も面白かった。こちらは剣道が武士道精神の涵養に大きな影響あることが分かった。

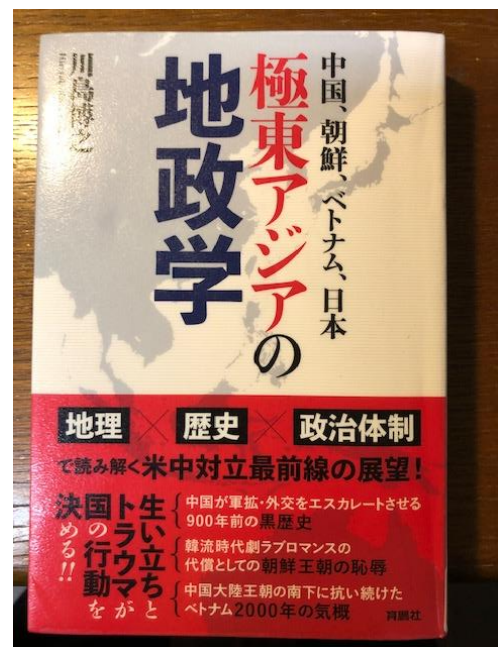
勝海舟の歴史的評価を下げる気は毛頭ないが、山岡鉄舟の歴史的評価はもっと上がってもよいと思った。彼は明治天皇の武道指南役を 10 年余り務めている。50 歳余で亡くなった際には盛大な葬儀が催されたそうだ。



2、「極東アジアの地政学」2021 出版 川島博之著

「秦檜の亡霊」という故事をご存じでしょうか。中国上海から西 200k 程離れたところに 12 世紀に南宋の首都であった開封（杭州）がある。ここに「岳飛廟」という英雄を祭る寺院がある。そのお寺の横の檻の中に老人夫妻が縄で結ばれ跪いて銅像がある。この銅像が「秦檜」である。

中国史の大家で京都大学教授であった内藤湖南は、現代中国の理解には宋時代以降の歴史で十分と説いている。それは宋時代に朱子学が起り、科挙制と中央集権体制など現在中国の国家の形が確立した。コミック雑誌の「キングダム」や三国志時代とそれ以降の中国とは全く異なる時代



だと説いている。

さて秦檜は生粋の漢人で科挙試験に合格したエリートだった。しかし東北に起こった金に宋は敗れ皇帝は捉えられ北に連れ去られ、北宋と南宋に分割された。そして秦檜は北宋の捕虜となるが、11年後に南宋に戻った。その後宰相にまで昇進し南宋の繁栄に大きく貢献した。しかし現代中国ではこの秦檜の評判が頗る悪い。そして習近平政権下の共産党幹部（特に外交部）にとって、秦檜は亡霊として大きな影響を及ぼしているという。南宋の繁栄に尽くした秦檜は汚職や不正を働いた人物ではなかった。しかしその外交姿勢は北宋との融和（非戦）であった。岳飛廟は観光地として今も賑わっているが、観光客は秦檜の像に唾棄するそうだ。

川島博之氏は元東大教授で農業学者である。中国の農業研究成果をベースに経済全体を俯瞰し、中国史を重ねて未来論を展開している。朝鮮とベトナムの造詣も深く大変面白い。本作は川島氏の初めての地政学書であるが、独自の地理・歴史・政治体制を分析しており面白かった。

### 3、「戸籍アパルトヘイト国家・中国の崩壊」2017 出版 川島博之著

はしがきによれば、友人が中国でパソコンに「川島博之」と入力した瞬間にネット接続不可となったそうだ。著者はこの著作で中国人のブラックリストの載ってしまったと自覚したそうだ。大学を退官してから現在はベトナムのハノイに在住しベトナム企業の顧問をしている。

さてこの本は農業学者として中国農村のフィールドワークの経験と中国留学生との30年近い交流などから、中国13億人の内9億の農民と4億の都市住民は戸籍上完全に分離され、農民はアパルトヘイト状態にあるという。そして共産党政権は4億の都市住民に重点を置いた政権運営をしている。9億の農民と都市籍のない都市住民（出稼ぎ者）などの低所得層を踏み台にして中国の経済成長が成り立っていると解説している。

習近平政権が目論む中国の夢（アメリカを凌駕して19世の世界覇権を実現すること）は幻想に過ぎないと主張する。不動産バブルが崩壊し、経済不況に陥り長期停滞に陥ると予想している。中国経済の衰退を予測する学者や評論家は多数いるが、この本は非常に説得力がある。その為川島氏は共産党政権に好ましくない人物としてネット制限を受けているのだと推察する。

中国人民解放軍の脆さや中国外交の幼稚性についても独自の見解を披露している。



### 4、「米中激突の地政学」2020年 茂木誠著 「墨攻」1991年 酒見賢一著

ロシア・ウクライナ戦争が始まって間もない3月頃、YouTube 動画でウクライナ人のナザレンコ・アンドリュウ氏が、「ウクライナは、ロシアという軍事大国には攻めることはせず、ひたすら守るだけだ。日本の専守防衛方針を正に実践している」と語っていた。そして大国に囲まれ核戦力

を持たない小国の辛い戦いを訴えていた。

ウクライナの悲哀に思いを巡らしていた時、「米中激突の地政学」（茂木誠著）を読んだ。その中の中国思想編で墨家の思想が紹介されていた。春秋戦国時代の諸子百家が輩出した時代、墨家は法家・兵家・儒家に並ぶ勢力をもっていた。その思想は「非攻」であり、決して他国を攻撃はせずに国家を治めるというものだ。しかし「平和主義とは似て非なる思想」と著者はいう。その参考図書として『墨攻』（酒見賢一著）が紹介されていた。

墨攻は、小さな城塞都市を「革離」という墨士

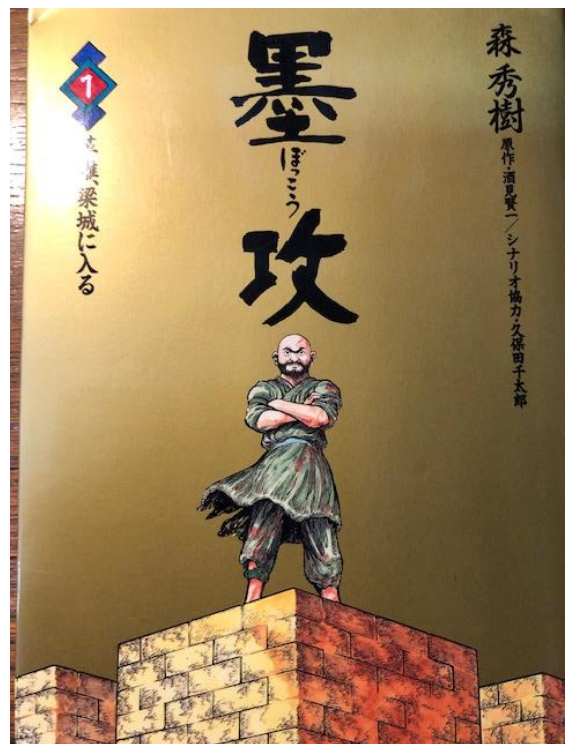
が訪れ、城塞内の住民と1500人の兵隊で2万もの

大軍相手に奮戦するという物語だ。本の「あとがき」で愛知大学教授の安本博氏は、「墨子や墨家集団について明らかになっている学問的成果にもとづく歴史的事実に類する部分と作者の虚構部分が相互循環で展開されている。言っ

てみれば、虚実織り交ぜた小説・・・」と解説している。

200ページに満たない短編小説だが非常に面白かった。またこの本を題材にしてコミック『墨攻』11巻（森秀樹作、原作：酒見賢一、久保田千太郎シナリオ）が1992年に出版されている。2006年には映画化もされており、大ベストセラーとなった。

戦後日本の防衛思想として専守防衛が支配したことがある。ウクライナの現実をテレビで日々見ながら、大国に囲まれ攻め込まれた小国の対応策はなかなか難しい。やはり基本的価値観（自由と民主主義）を共有する国家間の同盟しかないと思った。

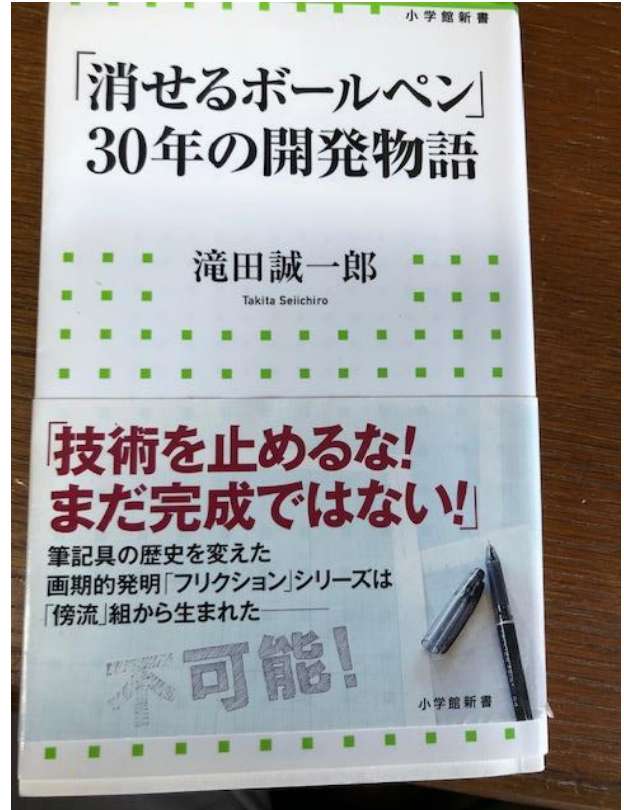


5、「消せるボールペン」30年の開発物語 2015年出版 滝田誠一郎著

この本はパイロットコーポレーション社のボールペン開発30年史である。消えるボールペンの方法はそれまでにもあった。鉛筆のように書いたあと紙面を擦って削るものだ。しかし現在ポピュラーな消えるボールペンの原理は全く異なる。温度によってインキの色が変わることに着目し、長年の研究の結果、特殊なインキは摂氏65度になると透明になることを発明したのだ。フリクションボールペンともいわれ、特殊なゴムで擦ることで摩擦熱を発生させ、インキの温度を高めて透明にするのだ。

日本では鉛筆が小中学の学習教材で主流だが、欧州では鉛筆ではなくボールペンが主に学習に使われるそうだ。そのためこの商品のマーケティングはまず欧州で始まった。幾多の試練を乗り越えて今やこの商品は同社の主力商品になった。技術者（開発者）と経営者の協力関係が成功の要因だと思った。研究開発は名古屋工場で行ったが、この商品の開発者であり製造責任者はその後工場長となり、子会社社長となり、最終的にパイロット本社の重役に昇進している。

なお三菱鉛筆との特許訴訟は知的所有権紛争事件として有名だ。三菱鉛筆はパイロット社の消えるボールペンの特許無効を訴えた。数年におよぶ裁判訴訟の結果パイロットの特許が認められた。ただ消えるボールペンの製造原理が判明した現在世界中で生産されているようだ。しかしパイロットのブランドが圧倒的に強く、市場を支配しているようだ。



6、「CASE 革命」2020年10月出版 中西孝樹著

著者の中西孝樹氏は中西自動車産業リサーチ社の代表だが、それ以前は証券会社の自動車アナリストとして2004年から6年間連続、自動車・自動車部品部門で日経ベリタス人気ランキング1位だった。中西の著作10冊余り読んだが、この本が最新のものだ。

今自動車業界は100年に一度の大変革期にあるという。その変化を「CASE 革命」と呼んだ。CASEとは、ドイツのメルセデスベンツ CEOであったディーター・ツイツェが名付け親とのことだ。コネクテッド (C)、自動運転 (A)、サービス・シェアリング (S)、電動化 (E) の英語の頭文字を引っ付けた造語だ。

EV化（電動自動車）が脱炭素化の世相を反映して話題としては一番大きいですが、自動車のハード面よりソフト面の飛躍的進化が凄いと力説している。単なる動く道具から交通渋滞情報やセキュリティや自動運転など自動車の機能が革新的に進化している。また個人所有の乗用車からMaaSという移動交通システム全体の変化も展望している。

エネルギー効率と安心安全を具備したスーパーシティ構想との関連性も大変興味深い。トヨタは御殿場の東富士工場跡地を使って、自動運転と人工知能（AI）の実証都市を2021年に建設着工した。そしてAI、インターネット、コンピューター開発の名だたる巨大企業（いわゆるGAFA）が自動車業界に参入しつつあり、既存自動車メーカーと凄まじい競争が継続中である。EV自動車で世界の先頭を走るテスラの株式時価総額が96兆ドル（2022, 8 現在）でトヨタを遥かに超えているのも興味深い。

EVは脱炭素化の切る札のように宣伝されているが、各社と各国の世界戦略はそのような単純なものではなく、既存勢力と新興勢力の覇権を賭けた激しい戦いであると筆者は強調している。

ただEV化は2015年に予想した普及率より相当遅れている。2022年現在ロシア・ウクライナ戦争を契機に世界的な電力不足と高騰が生じており、更にEV化が遅れる見通しであることを付記しておきたい。（2022, 8, 31 記す）

